

原子力開発の当初と今

日本の原子力開発は、被爆体験が原点にある。長田新「原爆の子」の叫び「正しく使ってほしい」（大きな期待）

当初の考え方（哲学）——問題点・危険（例えば退避道路・・・）の明示とそれらに対する誠実な努力とそれらに長期的かつ計画的に実行する体制とその監視体制——への国民の共感に応えた、その「契約」（聖書にいう）の重み

「契約」に対する官民関係者の取り組みの基本姿勢（重い責任、特に対大衆・対反対者・放射線安全の説明の煩雑に、耐えきれず？・・・）が漸次変質・劣化し、正面からの取り組みを避けるようになった。

その結果の一つとして「当事者—電力・会社・担当—to責任が来ないように」という原理主義が蔓延。例：原子力発電は国の方針（だからやっいる）、安全基準、安全審査に通っているから安全安心、初期には、米メーカーの意見、実証済技術しか使わない・・・、電力の「電話技術者」の出現もそのため？

一方、民営固執、官アレルギーで、何もかも電力（責任の重大性をあまり考えないで、・・・、功罪については後述、代替案？・・・）

原子力委員会などにも上記原理主義に感染。「当事者意見を尊重」「国民意見の聴取を優先、格好よく批判者意見を尊重」、これは真の批判者の消滅をも招いた・・・。

電力の独占——功として民営による効率性は当然評価され、官の墮落るからも「已む無き道」であった。しかし・・・

他業種の参入（特に燃料サイクル）を度外視したため、コスト・経営の非効率を招き、深刻な状況。

原子力発電所の安全性を自分で判断しないで来た結果、「規制に合格」だけでは、運転継続には不十分。柏崎は何時動く？

今からは、当事者（電力、各メーカー、原子力委、安全委）がそれぞれ、自らの責任・役割を積極的に、買った出ること。仲良しクラブでは信頼もされず、また綻びを広げることになる。